

## 定年退職教授紹介

# 川村輝典教授のご退任にあたって

古 崎 愛 子

川村輝典教授は1966年4月、本学の短期大学部に助教授として就任されてから1997年3月定年退職されるまで、30年間にわたり本学の教育に力を盡された。1988年短期大学部が四年制大学（現代文化学部）に改組され、新しい一步を踏み出すまでの21年間は短期大学部の教養科に在職され、後の9年間は現代文化学部の地域文化学科に在職された。更に本学には専任教員になられる2年前より、文理学部の非常勤講師として来られている。先生の御専門は神学であり、本学では一貫してキリスト教学を担当された。現代文化学部になってからはキリスト教思想史なども教えられた。このような先生について、全く専門領域を異にする私が先生の足跡を記すのは誠に僭越であり、不適任であるが、論集委員の方からの御依頼を承諾したのは、私の母教会である故熊野義孝牧師の武蔵野教会に川村先生が東京神学大学の学生として来られ、一時期同じ教会の会員同士であったこと、また先生が本学に赴任されたのが牟礼キャンパスで短期大学部が再出発する折りであり、私もそれまで務めた心理学科の助手の仕事にピリオドを打ち、牟礼キャンパスで専任講師として新たな一步を踏み出し、以来先生の御退職まで長きにわたって苦楽をともにしてきたからである。私がどれほど先生をお助けできたかわからないが、私は様々な局面で先生から多くを学ばせていただき、助けていただいたのを今改めて思いおこし、感謝の念を新たにしている。

川村先生は1953年東京大学文学部言語学科を御卒業後、東京神学大学に学ばれ博士課程修了後2年間、ドイツのゲッティンゲン大学神学部に留学されて神学について研鑽を積まれた。一方東京神学大学大学院修士課程を修了と同時に日本基督教団武蔵野教会担任教師として弦巻伝導所の担当者を務められ、以来その伝導所を教会にまで育てあげ、現在に至るまで牧師の仕事、キリストの福音を伝える伝導にも心血を注いでこられた。大学の教員は教育者であるにとどまらず、研究者であることを思えば、先生は二足の草鞋どころか三足の草鞋をはいて、一度も滑ったり転んだりすることもなく見事にこれまでの人生を歩んで来られたのである。敬服の一語につきる。そのうえ御研究面でも実に精力的なお仕事振りで、学術論文33編、10冊の著書、4冊の翻訳書を刊行されている。聖書学の面では先生は新約学者であり、とりわけ「ヘブル書」を中心に実に綿密な研究を続けてこられたことが、私のような素人にもうかがえる。御研究の立場、態度は神学大学時代の恩師、故熊野義孝先生、並びにゲッティンゲン大学留学時代の師を通して築かれたものであろう。教義学者であるとともに新約学者であり、

一信徒の耳にも「熊野神学」としてつとに名高い師のもとで研鑽を積まれた川村先生の御研究が、質高く同時に広がりのあるものであるのは明白であろう。また御専門の性質上、当然であるのかもしれないが、先生の語学力の幅の広さは大変なものでギリシャ語、フランス語、ドイツ語、英語を駆使して研究成果を挙げてこられた。厳密さ、根気強さが要求されると思われる研究テーマに取り組んでおられるお姿を垣間見る機会は当然のこと私にはなかったが、御自宅の書斎で研究に勤しんでおられる様子を私は鮮明に思い描けるのである。こうしたことが他の同僚に関して同じようにできるわけではない。それはひとえに先生のお人柄、個性によるとしかいいようがない。そのお人柄については後で触れたいが、その前に先生が本学で果された重要な役割とそれに伴う御苦労について記したい。

先生が本学に赴任されたのはキリスト教学担当の一教員としてのみならず、牟礼キャンパスにおける宗教教育の責任を担う宗教部長としてでもあった。ただし当時の宗教部には先生をお助けする職員は皆無であり、当時の学部長・故光明照子先生に川村先生が「宗教部とは何を指すのか」と問われた時、「あなた一人が宗教部なのです」との返答に、二の句がつけなかったと述懐しておられる。やがて宗教部委員会が組織され、10年目にしてようやく専任職員1名の採用が実現したのである。勿論この後も宗教教育に関し、想像をはるかに越える御苦労があったことと拝察するが、実に川村先生らしく黙々と、また誠実にその任を果されたのである。先生が在任中最も心を砕かれたのは、「どのようにしたら東京女子大学のよき伝統を保ちうるか」この一事であったのではないか。現在も現代文化学部の間年行事の一つになっている「全学カンファレンス」こそ、川村先生の発案によるもので短大発足一年目に実施されている。紆余曲節はあったが30年間継続しえたのは、一重に先生の信念と祈りの賜物であると私は確信している。先生はこと宗教活動に関しては頑固であられた。しかしその頑固さゆえに毎日の礼拝は1,2時限の中間に置かれ、時間も20分を守り通されてきた。平素は穏やかな方だが、戦う時には潔く戦う先生であった。「信仰は力なり」を本学の宗教活動で実践された巧績は誠に大きい。アメリカや日本の改革派教会の伝統に沿ったシンプルな牟礼のチャペルで、説教者として、また一信徒として毎日の礼拝を守られたお姿は誠に印象深く私の脳裏に焼きついており、終生忘れることはないであろう。

先生は実に几帳面な方である。何度か研究室をお訪ねしたがいつも書架、机は整然とし書類が散在していたためしがない。これは抜群の記憶力、明晰な頭脳と一脈通じているのではなからうか。こう記すと硬質なお人柄のように受けとめられるおそれがあるが、一方で先生は学生や同僚と親しく談笑なさるのを大変好んでおられた。歓談の席では、古い卒業生の名前、牟礼キャンパスの出来事を細部に至るまで覚えておられ、そこに牟礼キャンパスを愛し、学生一人一人を深く慈しんでこられた教育者としての先生の在りようを見出し、感銘を受けたのは私一人ではなかったであろう。今後の御研究の一層の御発展と御活躍を祈念してやまない。